

## コロナ禍における言語聴覚士の指導体制 ～院内外での新人指導・卒後研修について～

○中嶋 崇博<sup>1,3</sup>, 雨宮 直樹<sup>1</sup>, 長坂 麻衣<sup>1</sup>, 萩野谷 巧<sup>1</sup>, 依田 華<sup>1</sup>, 内山 量史<sup>2,3</sup>

山梨県立中央病院 リハビリテーション科<sup>1</sup>

春日居サイバーナイフ・リハビリ病院 リハビリテーション部<sup>2</sup>

一般社団法人山梨県言語聴覚士会<sup>3</sup>

【はじめに】2019年12月に発生したCOVID-19は世界に拡大し、リハビリテーション職種の養成校においても十分な臨床実習が行えない等の影響が出ている。そこで今回、当院や山梨県における、コロナ禍における言語聴覚士の指導体制について報告する。

【院内での指導】当院ではリハビリテーション科独自で新採用職員マニュアルを作成しており、8つのマニュアルに沿って指導を行っている。各マニュアル毎に1か月、3か月、6か月、1年以内の到達目標が示されており、新採用職員・指導者にて定期的に振り返りを行っている。また当院ではプリセプターを設け、OJTによる指導を基本としている。新人指導の内容としては、医療安全・接遇など多岐に渡っているが、感染症対策には特に力を入れており、院内には各部署の代表者を感染リンクスタッフと位置付け、感染管理委員会も設立されている。リハビリテーション科においても、PPE着脱・吐物処理訓練や環境整備訓練を行っており、ST部門では訓練毎の換気の徹底や、高頻度接触面の消毒等、日々の業務の際の感染対策指導を定期的に行っている。COVID-19に対しての指導も実施しており、新人の職員に対してもCOVID-19の基礎的研修やPPEの着脱方法の指導を行っている。また、当院では医療安全・感染関連等、各種研修会が充実しており、Web形式にてほぼ毎日実施されている。リハビリテーション科においてもスタッフによる研修会、症例検討会を定期的に行い、発信力や考察能力を養う場を設けている。ST部門としては週1回、症例検討会を行い、患者情報の共有や再考を行い、学びの場を失わないよう、できる限り感染症以前の活動を継続している。

【県士会での指導】院外での新人指導として山梨県言語聴覚士会では学術局生涯研修部、教育部が中心となって、各種研修会の企画や運営、新人教育指導などを行っている。感染症ガイドラインも作成し、感染状況に応じてWEB研修会・参加型研修会を行っており、令和2年度においては計12回実施され、令和3年度においては計21回の研修会が予定されている。参加者の約半数が5年目以下の経験年数の浅いSTであり、卒後研修の一環を担っていることが窺える。

【まとめ】コロナ禍の新人職員においては、十分な臨床実習を受けていない影響もあり、リスク管理能力の低さや、実際の患者様との接し方に助言を要する部分が見受けられる。その為、段階的な指導体制が必要であり、レベルに応じて、実務を体験させながら仕事や患者様との接し方を学ぶ、OJTによる指導体制の導入が有効と考える。またコロナ禍において発展したWEB研修会への参加を推奨し、院外から学びを得る、OFF-JTの教育方法を支持していくことも重要と考える。医療の質を落とさないためにも、院内外において感染症前の指導体制をできるだけ維持し、その場の状況に応じた学びの場を提供し続けることが重要であり、それこそが未来を担う後進の育成に繋がると考える。